五所八幡宮所蔵「大般若波羅蜜多経」

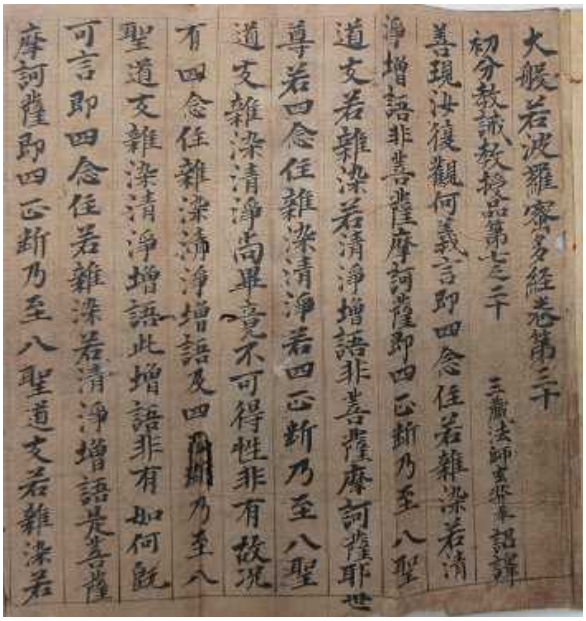
古賀市指定文化財第15号（令和3年5月26日指定）

発見地	慈眼庵 佐賀県嬉野市嬉野町 大字不動山甲3192
所在地	五所八幡宮 古賀市青柳1687-1
内　容	『大般若波羅蜜多経』 全600巻のうち５巻

大般若波羅蜜多経について

唐の時代、有名な玄奘三蔵（602～664）がインドから持ち帰り、最晩年の663年に完訳した、般若経典群の集大成が、全16部（会）600巻に及ぶ「大般若波羅蜜多経」です。

紀元前後からおこった仏教革新運動の中から生まれ、日本に伝わった「大乗仏教」の経典群の中で、最初に誕生したのが「般若経典群」です。わが国では、大宝３（703）年に大般若経を読み上げた記録があり、書写したものでは通称「和同経」と呼ばれる和同５（712）年の奥書があるものがあります。



『大般若波羅蜜多経』巻第三十冒頭部分

２行目の経名の下に「三蔵法師玄奘奉詔訳」の文字があります。

発見の経緯

大正15（1925）年９月に、佐賀県藤津郡西嬉野村（現嬉野市）の瑞光寺の隠居寺である同村不動山字上不動の慈眼庵の秘宝として大切にされてきた唐櫃の底が腐朽したため、それを修理しようとして発見されました。奥書から五所八幡宮に奉納されたものであることが分かり、昭和28（1953）年頃から五所八幡宮への奉納交渉が行われ、昭和34（1959）年2月に、終始がそろっている９巻のうち５巻が奉納されました。

現在の慈眼庵（佐賀県嬉野市）

五所八幡宮所蔵「大般若波羅蜜多経」（５巻）について

五所八幡宮の「大般若波羅蜜多経」は、すべて書写で、幅約8.5㎝、長さ約24㎝の折本。表紙は淡黄色地に茶褐色の草模様をあしらっています（慈眼庵には、高貴な人物の名を付した２巻がありますが、その表紙は錦）。書写のもとになった底本は思渓版蔵本（中国南宋時代に印刷されたもの）と考えられます。

奥書（参考：下表）から、これらの「大般若波羅蜜多経」は、応永年間（1394～1427）に、全国の僧俗の篤信家が、書写して五所八幡宮（当時は「若八幡宮」または「若宮八幡宮」と呼ばれていました）に奉納したものです。奉納者の背景や奉納目的は特定できません。また、なぜ「お経」が、神社に寄進されるのか疑問に思うところですが、当時のわが国の信仰の特長である「神仏習合」にあっては、珍しいことではないでしょう。

その後、長い間に欠巻がでてきました。永禄13（1570）年に疫病が大流行したので、祈願のため600巻の不足する分を購入して補っています（第一百九と第一百八十一）。

五所八幡宮に奉納されたものが、なぜ嬉野にあったのかはわかっていません。戦国時代、五所八幡宮は何度も戦火で焼失し、再建されています。天正11（1583）年の「戸次鑑連奉納社殿棟札」に、「糟屋郡院内青柳村延命山願成禅寺住山三晋字珪」「仏壇願主　飯田杢助夫婦」とあります。青柳村字木梨にあった願成寺が五所八幡宮の別当寺で、有力檀家に飯田家があったことがわかります。三晋字珪は立花宗茂に請われて天正19（1591）年に筑後に移っていること、発見時の慈眼庵の門徒総代が飯田元左衛門氏であったことなどから、願成寺が廃寺になった際に、「大般若波羅蜜多経」も移されたのでしょうか。しかし、嬉野との関わりは残念ながらはっきりとはわかりません。

巻番号	奥　　書
第三十	日本国西海道筑前劦三笠郡内　廣頴　戈十 於青柳郷 奉施入 若宮四所（原本：聖母の二字訂正）大菩薩御宝前也 干時應永十天癸未林鐘十九日書之
第一百九	應永癸未八月廿四日 釣隠子慶瓚拜書 永禄十三庚午年春天下一同大疫ス當圧此經斷絶ト云々 然條抽一心之志本尊共令買得 八幡宮寄進□畢　（□は不明字）
第一百一十四	日本筑前劦糟屋郡青柳郷内 奉施入若八幡宮御宝前也 干時竜集應永十天癸未季商十日 結縁拙者防劦江湖□南岩書　（□は不明字）
第一百八十一	干時應永十二年乙酉七月廿二日 江州志賀之郡粟津僧定悦書之 永禄十三庚午年春天下大疫ス當庄ニ此經斷ト云々 然條抽一心志本尊共令買得八幡宮ニ寄進畢
第一百九十六	應永十五年十月二日青柳之栖雲庵書写之　願主一箱四郎

（語句）　劦＝州　　干時＝「ときに」　　林鐘＝旧暦６月の別名
竜集：年号の後に付ける語　　季商＝旧暦９月
應永十年＝西暦１４０３年　　永禄十三年＝西暦１５７０年
天（應永十天癸未）＝年号の数字の後に「年」に変えて「天」と記す書き方
防劦＝防州＝周防国（今の山口県東部）　江州＝近江国（今の滋賀県）

令和４年３月３１日発行　　古賀市立歴史資料館